

入中1年人権だより

徳島市 八万中学校
1年生 第5号
2022年7月4日
編集・文責 吉成正士

居場所となるため、人権を発進する側に

■今回クラス代表の一人が発表するという場で、6人の意見を聞いたり、意見交換をして、またあらためて考えさせられました。初めて聞いたほかのクラスの人の発表は、とても心に残る言葉だらけでした。西くんの有名人の自殺を聞いて始まったネット差別を考えること、これは私たちに今後起きるかもしれないこと。

田中さんの児童労働のこと。私は「1本のボールペンを大切に持っていた子」がとても印象的でした。

中村さんのLGBTQ(同性婚)は、私も何度も考えました。なぜ現代の日本では、同性婚は認められていないのか。日本はまだ古いのだと思います。「魂が同じ体に入っただけ」この言葉は、私の心に深く刺さりました。

宮本さんの暴言・暴力からのいじめは、私の経験の中にないので、正直さらされる外になるということは難しいですが、宮本さんが言ったように、私も友達がいじめにあっていたら、話を聞き、先生に相談したりして、友達の一つの居場所になりたいです。そして私もそういう友達をつくりたいです。

西川くんの差別ということ、コロナが始まってから差別が前以上に広まって、傷ついた人もたくさんいて、これをなくすために仲間が本当に大切だと思いました。

これらの意見を目と耳と心で聴けたと思います。私もこれから人権問題を解決できるように考え行動していきたいです。
(5組生徒)

なら、中学生集会に行きませんか！

いったいどういう人が相談を受けるのか。自分は、どんな人なら相談に行きますか？誰にでも相談するわけではないと思います。やはり、相談に乗ってくれそうな人を見定めて相談に行くのではないのでしょうか。それはどんな人でしょう？考えてみてください。

洪染一揆については学習しましたよね。あの時も、一番相談に乗ってくれそうな人物として、筆頭家老のところへ行ったのです。結果的に「強訴」という形にはなりましたが。

相談されるような人、そんな人となるためにも、中学生集会に行ってみませんか。そして、人権を「発信する側」になってみませんか。

遠くのことには美しく生きられる

■人権作文発表会に参加して、発表してくれた人たちに、まず感謝の気持ちを伝えたいです。当たり前に勉強できていることが、遊んでいることが、どれだけ大切なことかということが分かりました。

障がい者だからという差別的な特別な見方はあってはならないことだと思います。今の私みたいに人権について考えていくのは、とっても簡単で単純なことだけど、考えたことを行動に移して動くということは、簡単そうに見えて全然簡単じゃなくて、すごく勇気のいる難し

いことだと思います。だからこそ自分ができる、精一杯できることをしていきたいです。

差別やいじめは遠くにあると思っているときこそ、とても近くにあると思います。自分に関係のないことなら他人事のように受け取って、いざ関係しているとなれば焦るのと同じように、いじめられている子が「助けて」と言ってからじゃないと助けられないではなくて、自分から助けに行くということが大切だと思います。私も相談できる友達を探し、友達も私も相談し合えるという人に出会いたいです。すべてのことを一度にするのは不可能なので、できることから始めていきたいです。

(5組生徒)

ではまず、中学生集会に行くことからはじめましょう。

中学3年生の「新しい道徳」という教材に、「峠」という資料があります。部落差別による結婚差別をテーマにした内容なのですが、その中にこんな一節があります。

「人は遠くのことに対して美しく生きられる。でも世間はそんなに甘くはない。あなたの結婚を認めたら、たちまち妹の結婚に大きな障がいとなってくる。見合いの話なんかは全くなくなるの。それが世の中よ。みんな自分にかかわりのないところでは、差別をなくそうなんて言えても、いざ自分自身の問題になるとそうはいかないの。」

主人公が、両親から結婚を諦(あきら)めるように説得を受ける場面です。主人公の苦悩する姿が目には浮かびます。

「遠くのことに対して美しく生きられる」まさに、他人事だということです。それが自分事となると、とたんに、手のひらを返したように、焦りはじめる。愚かなことです。「もし自分が相手の立場なら」と考えられないのかと、憤りすら感じます。

自分のことを大切に思っしてほしい、その思いに間違いはありません。でもそれが、「自分が良ければいい」となるのは、違うように思います。自分のことを大切に思うのと同じように、隣(となり)の人も大切に思っしてほしい。そして、「自分が良くなったら」、それで終わりにするのではなく、主人公のように「あの時」の思いを忘れることなく、次の人へ、また次の人へ、大切な思いをつなげていける人になっていっしてほしい。自分への被害がなくなったからといって、なかったことにしないでほしい。自分がされて嫌だったことを忘れず、新たな被害が起きないために、いつまでも歩き続ける人であってほしい。そんな人になってほしい。そう思います。

自分を語ること、そしてつながること

■6人の発表者の方は、みんなはっきりとした考えや意見を持ち、それを行動に移して、素晴らしいなと思った。なかには自分が実際に経験したことを生かして、次につなげていこうとする人もいて、そのような強い

意志を持てる、行動できるというのは、すごいことだと感心した。

それぞれのテーマはバラバラなのに、何か共通するようなものを感じた。その共通するものが何なのかは分からないが、人権について真剣に考えているという姿勢は読みとることができた。

作文を聞いて意見交換をするときに、みんなが作文の内容に共感、そして理解をしていた。それぞれの作文の中に、「私と同じだ!」と分かり合える部分や、「確かにそうかもしれない」と納得できる部分が盛りだくさんに含まれていたからだと思う。また作文の感想だけでなく、作文を聞いて、「自分はこうしたい」と自分に当てはめてみたり、「新たな疑問が生まれた」とさらに考えを広げている人がいて、すごいなと思った。

人権の輪を広げていくためには、あらためて語り合うことが大事なんだなと思った。語り合うことで、相手の意外な一面が見えてくることもあるし、自分の思いを知ってもらえるチャンスだと感じたからだ。人権作文発表会で発言できなかった人も、作文を聞いて何かしらは思っているはずなので、その人たちの意見も聞きたいなと思った。簡単なものだとしても、自分のことを話してくれると、きっと思いが相手の心に届けられていくと思うので、私もみんなも、たくさん自分の思いを打ち明けられるようになるといいなと思った。(2組生徒)

「自分を語る」ことの大切さです。言い方を変えれば、「自分を表現する」ことの大切さです。表現する方法はたくさんあります。歌うことや文・詩を書くこと、イラストや絵を描くこと、ダンスなどのスポーツをすることなど。何でもいいんです。自分を、自分らしさを表現できれば。それを、「語る」を通してやっていこうということです。

私は昔、中学生は「語らないもの」だと思っていました。そう決めつけて、語る機会を奪(うば)っていました。そうする方が私にとっても、生徒にとっても楽だから。でもそうすることで、当時の中学生の、「自分を表現する力」を奪っていたのだと思います。自分のことを伝えることの楽しさ、そうすることで人とつながれる喜び、を奪っていたのだと思います。それを覆(くつがえ)してくれたのが、中学生のみんなでした。

自分の中にある本当の思いを、心臓をバクバクさせながら、マイクを持つ手を震わせながら、何を言ってもいいか分からなくなりながら、顔を真っ赤にして、頭は真っ白になって、泣きそうになりながら、声を絞り出すように震わせて「自分を語る」中学生を見て、それまでの自分の間違いを恥じました。「中学生はできる!」「中学生は手を挙げて自分を語るができる!」そう思えるように変わりました。ちなみに、発表していた中学生からマイクをもらいに行ったときの、異常なまでのマイクの熱さ。どれだけその子が必死に、自分を奮い立たせ頑張っていたかを、手のひらから伝わった「熱」から感じることができました。しゃべり終えてイスに座ったときの、ホッとした、でもやりきったという、爽(さわ)やかな表情。そんな思いを、そんな表情を、多くの方々に体験してほしいなと思います。

当事者の声に耳を傾けること

■6人の作文は、どれも何かの問題について、自分はどうのように考えなければいけないのか、どのような行動をとればいいのか、いろいろ考えさせてくれる作文だった。今回の発表会で大切なことは、吉成先生が言ってくださったように、6人の作文を通して自分を見つめ直し、それぞれの問題について深く考え、行動に移していくことが大切だと思う。この行動に移すということは大切なことであり、難しいことでもある。でも一人一人が勇気を出して良い行動をとれば、身近な人権問題が解決していくのではないかと考える。

ほかに私が思ったことは、人権問題で悩まされていた人、そういう体験がある人に話を聞くことが大切だと思った。本やインターネットで調べるよりも、実際に体験した人に、その当時のことを聞いた方が、差別やいじめなどを受けた立場になって考えることができると思うからだ。相手の立場になって物事を考えることは、すごく大切なことだと思う。一人一人が相手の立場になって、人権問題について自分のできることを考え、実行していくことが大切だと私は思う。(2組生徒)

「当事者の声に耳を傾ける」これは本当に大切なことです。

人権や差別の問題について学んでいくなかで、いつの間にか、当事者のことを分かったようなつもりになって、当事者抜きで物事を判断し、決めてしまうことがあります。当事者が、本当はそんなこと思ってもなく、望んでもないのに。

みなさんも、自分の考えや意見を抜きにして、「あなたのためだから」と言われて物事を決められたことはありませんか? それで不快な思いをしたことはありませんか?

当事者が声をあげるのは、大変なことです。声に出すことで、さらなる被害を受ける可能性があるからです。いじめでいえば、声に出すことで、さらにいじめを受けるようなものです。相手は、そう思わせて「泣き寝入り」させることがねらいです。それで自分の罪から逃れようとするわけです。

1年半ほど前、八万中学校に、シンジとはなちゃんという部落出身の若者に来てもらい、部落差別や人権問題について語ってもらいました。今の中3と高1のみなさんに参加してもらい、聴いてもらいました。自分の身のまわりで起こった部落差別について、リアルな思いを語ってもらったのですが、多くの方がそこで、今まで実は「分かってなかった」ということが、分かったと思います。実際に当事者の声を聴くことの大切さを痛感したと思います。

そのシンジとはなちゃんに、あらためてこの7月、「人権を語り合う中学生交流集会+」に登壇(とうだん)してもらい、部落差別や人権問題について話してもらうことにしています。みなさんにもぜひ聴いてもらいたいなと思います。

(第6号につづく)



**人権を語り合う
中学生交流集会+'22**

笑顔の渦で 優しい世界を描け!!
~輝かしい未来に向かって~

日時 2022年7月24日(日) 10:00~16:10
会場 福門市人権福祉センター
主催 「人権を語り合う中学生交流集会+'22」 実行委員会
共催 福門市教育委員会

入場料	1000円	全席
会場	1000~1200円	全席
会場	1300~1600円	全席
会場	1600~1800円	全席
会場	1800円	全席

Copyright © 2022. all rights reserved.